

緒論：形態学的な学問は、生理学と密接に関連しているが、それに加わりさらに生化学の観点から総合的に追究するような体制が成り立っている。第一報においては、消化管の働きである消化・吸収の立場から特に血管の走行について観察を行った。本実験では、腸管の一部である回腸と盲腸との境界部においての組織学的な差異、特に回盲弁(Bauhin弁)粘膜における上皮と結合組織(弾性、格子、膠原線維)の相違について検討を行った。

材料と方法：本実験に供した動物は、SD系の雄ラットで8週齢、体重は約250gである。

この動物の正中線に沿って切開し、腹腔にある胃から直腸までの臓器を全摘出した。本実験の目的である、回腸から盲腸までの回盲部位を切り離した。その臓器は10%ホルマリンに浸漬し、その後通常のパラフィン包埋を施した。薄切は3 $\mu$ mとし、各線維染色はMassonの変法、Elastica Van Gieson、および鍍銀染色を実施した。

結果：回腸と盲腸は、回盲部に存在する回盲弁(Bauhin弁)によって明確に境されている。しかし、現在では、回盲弁が大腸域または小腸域のどちらに存在するかについて明記されていない。今回の実験結果から、回盲弁は形態的検索から、小腸域に存在することが示唆された。また肉眼的観察から、ヒトにおいては盲腸と結腸の境界は不明瞭であるが、ラットにおいては盲腸と近位結腸の境界が明瞭に認められた。